

## 第 23 回 (2014.07.01 配信)

### 篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

#### 与力と同心

時代小説やテレビなどで「与力」とか「同心」とかの役人が出てきますが、町奉行所や火付け盗賊改め方などとは関係のない部署でも与力とか同心の言葉が出てきますから混乱します。与力とか同心という役職は、なにも捕物関係だけの役職ではないのです。

与力は、「寄騎」とも書きますが、鎌倉、室町時代においては、武将や大名に従う下級武士でした。戦国時代においては有力武将の上級家臣の下に就く騎馬武者のことを指しましたが、江戸時代には奉行や番頭(ばんがしら:部隊長)などの下に就いた武士のことです。同心とは、与力の下に就いた軽輩の侍で、大半は戦時で「足軽」と呼ばれた人たちでした。

与力は、本来の意味は寄騎と書くように馬に乗れる身分であり、「味方する人」を指した言葉でしたが、室町時代になってくると有力な武将に味方する土地の小豪族を意味していました。この有力な武将を「寄り親」、味方する者を「寄り子」といいました。

戦国時代になると、大名たちは家臣である有力武将(寄り親)に、この小豪族(寄り子)を家臣にさせると有力武将の力が強くなり、謀反が起きることを警戒して配属に苦労したようです。江戸時代になってからは、幕府の重臣たちの下で、同心を配下にもって重臣の補佐にあたりました。有名なのは町奉行所の与力で、町民たちから鳶の頭、力士とともに「江戸の三男(さんおとこ)」と呼ばれ、多くは 200 石取りくらいの旗本でしたが、不浄な罪人たちと接するから「不浄役人」と呼ばれて、本来将軍に拝謁できる身分(お目見え)でしたが、拝謁できませんでした。

同心とは、もとは目的や志を同じくする者であり、また協力し味方する意味がありましたが、江戸時代になって、幕府の足軽を同心としていろいろな役に就かせました。忍者を祖先に持つ「甲賀同心」や「伊賀同心」、また、国境警備のための「八王子同心」など多くの同心がいました。

ドラマなどでおなじみの町奉行所の同心は、30 石 2 人扶持という軽輩でしたが、商家などからの付け届けもあって、岡っ引きや目明しなどを雇えることができました。とくに大名たちは、参勤交代に従って江戸にきた藩士が起こす江戸の地理や習慣などに不案内からくるトラブルを、内緒で処理したいがために付け届けする習慣があり、比較的裕福だったようです。

町奉行所の与力・同心たちは、毎朝銭湯の女風呂に入れました。一般の女性たちが朝早くから入浴する習慣がなかったことや、町民は役人と一緒の風呂では気づまりだったことなどが理由でしょうが、隣の男風呂での町民の会話から犯罪を未然に防いだり取り締まったりできるという理由もあったようです。

それにしても、男性にとってはうらやましいというか、おいしい特権があったものです。

#### 東西町奉行と南北町奉行

江戸時代の町奉行といえば、南町奉行とか北町奉行とかは時代小説に出てくることが多いのでおなじみですが、東町奉行とか西町奉行とかの言葉が出てきますと混乱する人が多いようです。じつは、南北町奉行は江戸におかれ、東西の町奉行は大坂、京都におかれていました。関西を舞台とする捕物小説が少ないことによる混乱だろうと思います。

幕府は、江戸の町の治安を守るために、通常 2 名の町奉行を任命して、南町奉行所と北町奉行所に詰めて、それぞれ交代で勤務しました。一時期、江戸中町奉行が設けられたこともあ

りました。これと同じように、大阪や京都の治安を守るために、通常 2 名の町奉行をおきました。奉行は東町奉行所と西町奉行所に詰めて交代で勤務しました。

江戸幕府は、町の治安を守るために、江戸以外に幕府直轄地である大阪、京都、駿府あるいは長崎などに町奉行所を設置しました。これを遠国(おんごく)奉行と呼び、老中の指揮下に置きました。この遠国奉行には、ほかに奈良奉行、伏見奉行、堺奉行、山田奉行、下田奉行、日光奉行、佐渡奉行、函館奉行、新潟奉行、羽田奉行などがありました。

大阪町奉行は、配下に与力 30 騎、同心 50 人、京都町奉行は与力 20 騎、同心 50 人で町の治安を守っていました。老中の指揮下にあったとはいえ、事実上大阪町奉行は大阪城代、京都町奉行は京都所司代の指揮下にありました。京都所司代は鎌倉時代の六波羅探題にならって、織田信長が京都や西国の治安維持のために設置されたもので、幕末には京都守護職がおかれ所司代はその支配下におかれていました。

これに対して、江戸町奉行は、呉服橋に北町奉行所、数寄屋橋に南町奉行所がおかれ、各々与力 25 騎、同心約 120 名を配下におき、江戸の治安を守る警察、消防の他に、行政、司法、立法など、現在でいう東京都知事、裁判所長官、警視総監、消防総監などを兼ねていました。

有名な大岡越前守忠相(おおおかえちぜんのかみただすけ:1677~1752)は、山田奉行のときに紀州領との領地問題で公平な裁きをしたことから、紀州藩主から將軍になった徳川吉宗に見いだされて江戸町奉行に抜擢されたという逸話があります。しかし、遠国奉行から江戸町奉行は順当な出世コースであり、特段の抜擢でもないようですが、1920 石の旗本から後に 1 万石の大名に異例の出世をしました。

有名な「遠山の金さん」こと遠山左衛門尉景元(とおやまさえものじょうかげもと:1793~1855)は、北町奉行の後に南町奉行になった珍しい経歴の持ち主ですが、本当に入れ墨をしていたのかどうか疑問視されています。また、南町奉行の鳥居甲斐守耀蔵(とりいかいのかみようぞう:1796~1873)が天保改革の強行派だったため、町民たちは鳥居耀蔵が悪玉で、それに対抗した遠山景元を善玉にしたのだとの説もあります。当時の裁判のほとんどは吟味方(ぎんみがた)与力が行って、結果をいい渡すのが奉行の役割だったというのが実態で、大岡忠相にしろ、遠山景元にしろ、巷間に流布されているような人情裁きはなかったというのが定説です。

(篠井純四郎)